

行動の自由を制限したかを示すものである。將校團、軍隊のこれに服従して居つた部分に取つては、選擇といふ自由を取る事が出来なかつた。過激派と、多數派社會主義者と兩方に對して、同時に戰鬥を始める事は不可能であつた。消極的受身の立場を取つて居つたならば、畢竟單に過激派の乗する處となつたであらう。故に多數派社會黨の味方となり、彼等を援助するより外仕方がなかつたのである。思ふに多數派社會黨は、又以前の敵と同盟を結ぶ事は、多くの犠牲を拂はなければならぬ事、暫くの間様々な希望を葬り去らなければならぬといふ事を感知して居たであらう。然し彼等に取りても、今や黨派の死活問題であつて、さうする外に選擇の自由はなかつたのである。

千九百十四年八月四日以來、多數派社會民主黨は二つの世界の間の、狭い危険な道の上を歩いて居た。其の將來は暗黒で、其の同盟の結合は安心すべきものではなかつた。

過激派と多數派社會黨との間に、獨立社會黨が立つて居たのである。彼等は、戰爭前に於ける舊社會民主黨の道を、一直線に進まうと欲したのである。國際的大會及黨大會に於ける諸決議は、彼等の意見では、又世界大戰に對しての方針とすべきであつた。平和主義的根本精神からして、彼等は如何なる價を拂つても、世界的殺戮を止めさせようとして欲し、此の目的の爲には、如何なる手段を選んでもよいと考へた。彼等は、戰爭に對する憎みを宣傳し、民衆を國家的思想に反對する様に煽動

したのである。然し彼等は革命的行爲に對する責任を、自ら引き受けると云ふ勇氣を持ち合はさなかつた。故に彼等は、十一月の革命の成果を収める爲、引續いて起つた戰鬥に際して、指導的役目を演ずる事が出来ず、却つて彼等は、遂に確乎たる態度を失つて奈落に墮ち込んだのである。

然し彼等は、軍隊と國民との尙武的精神を害した事に於ては、恐くは過激派以上であつた。過激派は公然、非國法的手段を取つたが故に、これを防ぐ事も容易に出来たが、然し獨立社會黨、少くとも其の表面に立つ幹部は、極めて巧に刑法に於ける反逆罪の暗礁を避ける事を知つて居たのである。彼等にとつて幸な事は、例へば千八百十七年の水兵暴動の場合に於ての様に、それが爲に國家の利益が非常に傷つけられる場合でも、法律の一字一句が彼等の敵手に依て、恐ろしく嚴密に重んぜられた事であつた。かゝる事情の下にありて、彼等は實に戰爭中、國家思想に取りて最も危険な者共であつた。彼等は足音をぬすんで國中を歩き廻り、何處でも取り押へることが出来なかつた。彼等は、危険が迫るや否や巧に逃げ隠れたけども、國家思想が攻撃點を向けた處には、何時も現はれて居たのである。彼等は屢々有效な突撃を行つた。最も危険な突撃は、實に彼等が常に其發生に參與した、かの千九百十七年の海軍暴動であつて、當時獨逸の武力が蒙つた傷は、再び癒されなかつた。此の傷口は、千九百十八年十一月の初めに至つて、再びキールに於て破れたのである。

幾百萬の人々が戦線に於て血を流し、又死に趣きつゝあつた國家存亡の秋に方つて、國家に取つて危険なる行動や、巧に隠れた反逆罪を力強く撲滅する爲に、政府及び議會に於ける責任ある指導者が、何等の手段を見出さなかつたといふ事は、國家的立場から觀察して一つの罪責である。此の罪責は第二には又將校も之を受くべきものである。成る程總統帥部は警告をしたり、或は汎ゆる手段によつて國家的精神を鼓吹する事を試み、又マルクス主義の宣傳に對して戦つた。又成る程將校達は少くとも軍隊にあつて、大體に於て個人的精神を保持する事に成功したのである。然し水兵暴動と云ふ化膿した腫物は、白熱の鐵を以て焼いてしまはない中は、内部の健康を恢復する事が出来て居なかつたのである。又かの十一月の出來事に於て、國內に於ける軍事官憲は、行政官憲と等しく、革命に對する闘ひに於て、一部分役に立たなかつたのである。此事も亦國家破滅の原因の一つであつた。

國家的思想と國際的思想との闘が、世界大戰の成行きに及ぼした影響を、言葉短かに擱んで見ると、此戦は主として軍隊の力と、民間に於ける尙武の精神とを、弱めたものであるといふ事が出来る。此の戦ひによつて破滅は早められ、其影響によつて這回の戦争は、勇敢なる一國民に取りて相應しからぬ形式で終つたのである。軍隊が果して、革命が突發せず、又それに先立つて根柢を掘り

返す様な事實がなかつたとしても、尙長く戦闘を續ける事が出来たであらうか、又屈辱的平和條件に對して、反抗する事が出来たであらうか、是等に關して議論の餘地は多くあるであらう。然し獨逸國民は千九百十八年の十一月に於て、名譽ある姿を現はして居たとか、或は又獨逸國民が自ら革命を『起した』と揚言した人々の勧めたのは良い事であつたとか、或は又獨逸國民が平和談判が始まつた瞬間に最後の武器を投げ棄てたのは、利口なやり方であつたと云ふ様な事は主張出来ないであらう。新時代の確信的な渴仰者と雖も、共和國の生れた時刻は、暗黒の影に掩はれて居るといふ事を拒む事は出来ないであらう。

千九百十四年八月四日と千九百十八年十一月九日とは、國家的思想と國際的思想との間の全世界を動かす戦闘の兵站に過ぎない。戦闘は容赦なく進んで行くのである。國家的思想は、舊軍隊の没落によつて、獨逸にあつては其の最も強い支持を失つたのである。然し此の軍隊の精神は、ヴェルサイユの獨裁的平和條件によつても滅ぼされないし、又國內に於ける平和主義的及マルクス主義的の宣傳によりても窒息させられない。此の精神は尙國民の中に生きて居るのであつて、新らしき國民の運命を決する時が来る時に、再び指導的地位を取るに至るであらう。然し軍隊とマルクス主義との間の將來の闘に於て、有利な地位を占めるものは、過去の失敗や誤謬に依て、最も多く教訓を

體得し、明瞭な決然たる態度を以て、其目的を追及する者にあるであらう。

マルクス主義と獨逸軍隊 畢

凡の革命も大なる革命も小なる革命も其の目的は必ずしも同じである。然るに其の手段は必ずしも同じである。マルクス主義の革命は、その目的は社会主義の實現であるが、その手段は暴力の革命である。獨逸の革命は、その目的は國家の統一と強國の地位であるが、その手段は暴力の革命である。マルクス主義の革命は、その目的は社会主義の實現であるが、その手段は暴力の革命である。獨逸の革命は、その目的は國家の統一と強國の地位であるが、その手段は暴力の革命である。

昭和三年五月廿五日 印刷
昭和三年五月三十日 發行

【定價金壹圓五十錢】

不許
復製

譯者 參謀本部

發行者 綾部勉
東京市麻布區霞町四番地

印刷者 石原勘一郎
東京市牛込區早稻田鶴卷町三百八番地

發行者

東京市麻布區霞町四番地
振替東京一七二九〇番

不二書院

Vertical text on the right edge of the page, possibly a page number or reference.

登作洋

昭和十一年十二月二十日

不二洋行

不 貴
指 銀

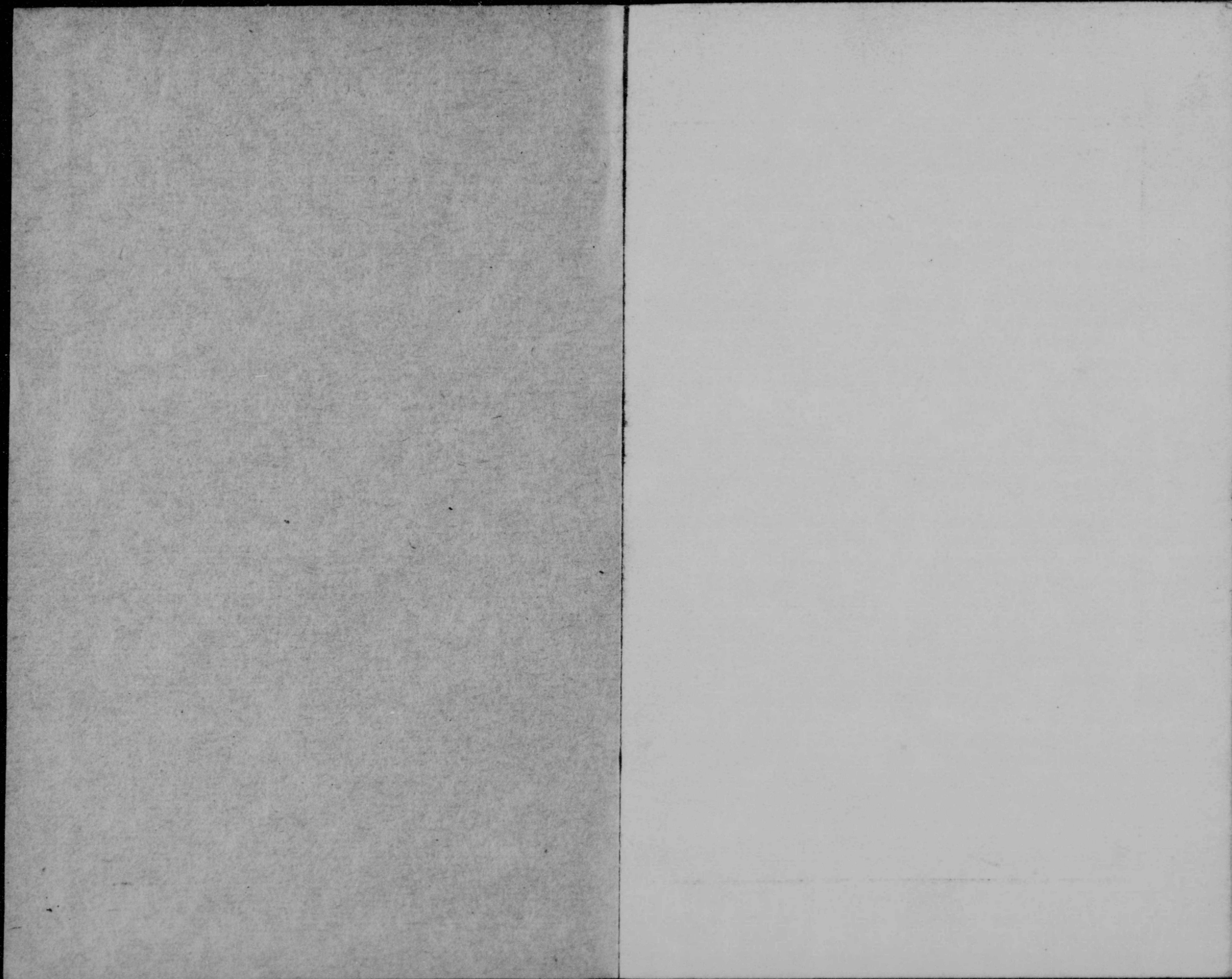
相 關 洋 行
登 作 洋 行
不 二 洋 行

昭和十一年十二月二十日

「支那全圖」正十卷

マルクス主義と獨逸軍隊





575
237

